
ぼくのドラえもん

神田春希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくのドラえもん

【Nコード】

N5974I

【作者名】

神田春希

【あらすじ】

「ドラえもん。

僕のことなら気にしないでいいから。

ドラミちゃんに会うんでしょ？ 久々なんだし、ゆっくりしてきていいよ」僕は「早く帰ってようかな？」と心配そうにする親友

——ドラえもんに向かって、満面の笑みを浮かべる。

▲▲『ぼくのものび太くん』にリンクしています。

のび太目線で回想シーン多めです。

第一話

「ドラえもん。」

僕のことなら気にしなくていいから。

ドラミちゃんに会っんでしょ？ 久々なんだし、ゆっくりしてきていいよ」

僕は「早く帰ってこようかな？」と心配そうにする親友——ドラえもんに向かって、満面の笑みを浮かべる。

ドラえもんは大事な親友だ。

今も、これからも、それは絶対変わらない。

でも、ドラえもんが未来に行くのは、本当はちょっと。

——ちよつとだけど、心配なんだ。

それは、この前ドラえもんが未来に帰ると言うことが、本当にあったから。

でも、僕はそんなことを考えているのを悟られないように、わざと笑顔を作る。

僕は躊躇するドラえもんを急かすように、タイムマシンに乗せた。「ゆっくりしてきなよ」

僕はドラえもんに再度言う。

ドラえもんは僕を振り返ると「のび太くんこそ、気をつけてね」

と丸い手で僕の手をぎゅっと握った。

その手は柔らかくて、温かくて——僕はすっかり「やっぱり僕の傍に居て！」と言いたくなったけれど、その言葉を飲み込む。

「もう——ドラえもんは心配性だなあ。

大体、今日の僕の予定は昼寝って決めてあるんだから、そんなに心配しなくても大丈夫だって！」

僕は先ほどの考えを否定するように、多少オーバーにおちゃらけてみた。

「そう？ ……じゃあ、ぼく、行ってくるからね？」

ドラえもんはそう言っていると、寂しそうにタイムマシンの操作を始めた。

「くれぐれも、気をつけるんだよね？」

タイムマシンが動き始めても尚、僕のことを心配するドラえもん。次第に小さくなっていく友達に僕は「大丈夫だよー！」と叫んだ。

第二話

——ドラえもんが居なくなると、僕の部屋は途端に広くなった気がした。

「ドラえもんが来るまでは、これが普通だったのにね」
誰も居ない部屋で、僕は独り言を言う。
それは、なぜか、僕の心に寂しさを植えつけて、あの日のことを思い出していた。

忘れもしないエイプリルフル当日。
あの日、ジャイアンとスネ夫のいたずらが、僕とドラえもんにと
って忘れられないものになった。

あのいたずらがなかったら、僕はドラえもんと永遠に会えなくな
るところだったから。

ドラえもんが帰ってしまってから、僕は毎日。
ドラえもんの道具が入った箱を眺めていた。
時にはドラえもんに伝わるような気がして、あの箱に語りかけた。

その日も、そうだった——

「ドラえもん？ 今日先生に褒められたよ？」
僕が先生に褒められるなんて、ドラえもんはびっくりする？
最近、僕。

色々——色々頑張ってるんだよ？

ドラえもん……ドラえもん……また、会えるように……」

「おい！ のび太！！
居るのか？」

表から急にジャイアンの声がして、僕は窓から顔を出す。

「なに？ ジャイアン？」

「ちょっと降りてこいよ！
早く！ 早く！」

僕はジャイアンに急かされて、表に出た。

ジャイアンは深呼吸をすると、僕の肩に手を置いてゆっくり、こ
ういった。

「落ち着いて、聞いてくれよ？
さっき誰にあつたと思う？

ドラえもんだよ。ドラえもん！！」

「ど、ドラえもん？！」

僕の心臓はときどきと鼓動を早めた。

そんなことつて有るんだろうか？

未来からドラえもんが帰ってきたなんて？

「なああのび太。今ならまだあっちの角の所に居るかもしれないぜ？
早く行ってこいよ！」

僕は分けもわからず、ジャイアンに急かされてドラえもんが居た
という場所まで来てみる。

……誰も、居ない。

やっぱり帰ってくるわけないんだ。

そう思って家に帰ろうとすると、横の道から急にスネ夫が現れた。

スネ夫は相当あわてているみたいだったけど、僕を見てこう言った。

「のび太！ おい！ ドラえもん帰ってきてたんだな！ さっきそこで会ってさ、ほんとビックリしたよ！」

「ドラえもんに会った？！」

ジャイアンに続いて、スネ夫までドラえもんに会ったという。本当？ なの？

「のび太はまだ会ってないの？」

「う、うん……」

ドラえもん、何処にいるの？

もしかしたら、もう家に行ってる??！

僕は気が付くと全力で走っていた。

ドラえもん。

丸くて、青くて、大好きな、僕の親友。

ちよつとおつちよこちよいで、お茶目で、僕のことを一番に考えてくれる。

大好きな、大好きな親友！！

第三話

「ドラえもん！

ドラえもん！！ 何処にいるの？」

僕は家に着くなり大声を出しながら、あちこちの扉を開ける。
でも、なぜか、ドラえもんは見つからない。

「どうして、ドラえもん出てきてくれないんだろう？」

家中を探索してから、僕は一人呟く。

——もしかしたら、あいつ照れくさくて、いるんじゃないかな？

そうだよ、きっとそう！

僕は別れる時、大泣きしたことを思い出した。

きっとそれがちよつと恥ずかしいんだよ。

そんなこと、気にしなくていいのに。

君が居てくれるだけでいいのにな。

せつかくドラえもんが帰ってきてくれたんだから、あいつの喜ぶ
顔が見たい。

僕はいいいことを思いついた。

貯金箱を割って、お金を数える。

大体三千円くらい貯まっていた。

そのお金を握り締めて、僕は軽やかにお店に向かった。

「ドラえもん、喜んでくれるかな？」

僕はどら焼きの入っている紙袋を抱えて帰路につく。

どら焼きの甘い匂いが僕の鼻先をくすぐる。

『ええ〜！　こんなに！　どら焼き全部くれるの?!　』　『そういいながらニコニコと笑うドラえもんを思い浮かべ、思わず口元をほころばせた。』

僕はドラえもんが大好きだから、喜ぶことをいっぱいしてあげたいと思う。

今までは居て当たり前だと思っていて、自分のことだけで精一杯だったけど、今は違う。

僕は、大好きな親友がいつまでも幸せで居られるように、自分の出来ることは何でもやってあげたいって思ってるんだ。

家についても、まだ、ドラえもんは顔を出してくれない。

僕は大きなお皿にどら焼きを山みたいに積んで、ドラえもんが出てくるのを待った。

―― 10分 ―

―― 20分 ―

―― 30分 ―

まだ、かな？

ドラえもん、遅いな……。

僕はなんだか不安になり、外を探すことにした。
もしかしたら、いつもの空き地に居るのかもしれない。

「ドラえもん〜！」

出てきてよ！ 早く会いたいんだ！」

僕は空き地に行くと、すぐに叫んだ。

そして、くまなくあちこちを探す。

「ドラえもん……」

ドラえもんは居なかった。

僕は寂しくなつて少し鼻の奥がつんとした。
その時だ。

「なにお前？ まだドラえもんって言ってるの？」

「のび太は馬鹿だなあ。まだ気が付かないなんて！」
背後からジャイアンとスネ夫の声がした。

「どういう……ことだよ」

僕は振り向きながら、彼らを睨む。

「今日、何月何日か知ってたか？」

「……？ 何？」

「今日は4月1日だよ？」

これだけ言つても分からない？」

4月1日——？！

僕はどきりとした。

まさか。

まさかだよな？

そんな悪趣味な悪戯……するわけないよね？？

「まだわかんねーの？」

4月1日って言ったらエイプリルフル！
4月馬鹿の日じゃないか！」

僕は、目の前が、真っ暗になった。

第四話

酷過ぎる。

酷いよ。

あんまりだよ――。

部屋に着くなり、僕は泣いた。泣きじゃくった。

ドラえもん。ドラえもん。ドラえもん――。

僕はなんて馬鹿なんだろう。

君が来るはずないで分かっていたのに。

大きなお皿に乗っているどら焼きが、僕の目に映る。

あのウソが本当だったら、ドラえもんはこのどら焼き、食べてくれたのかな。

ふと僕の手が、あの箱に触れた。

そういえば急にジャイアンに呼び出されたから、押入れにしまい忘れてたんだっけ。

僕はぼんやりと箱を眺めた。

すると『困ったときに開けるんだよ』ドラえもんの声が聞こえたような気がした。

そつとふたを開けると、フラスコのような瓶が入っていてその中には透明な液体がある。

「ウソエイトオーオー？」

説明書にはこの薬を飲んで喋ると、喋ったことがみんなウソになると書いてあった。

僕は薬を飲むと、すぐにジャイアンとスネ夫の所へ行き、その道具の効果を試した。

効果はてき面で、僕は気分よく家に帰る……はずだった。

でも、この胸にぽっかりと開いてしまった寂しさは、埋めることが出来ないみたいで、僕はなんだか涙が出そうになった。

家に帰るとママが「どらちゃんはどこ？」って僕に聞いてきた。さっき僕がドラえもんが帰ってくるって大騒ぎしたからだ……。

「ドラえもんが帰ってくるはずないでしょ。もう二度と会えないんだよ！ 会えるわけじゃないか！」

僕はそつ叫ぶと二階へと走った。

そう、ドラえもんとはもう二度と会えない。たとえばこの、僕の部屋の扉。

これを開けてドラえもんが『お帰り。のび太君』って言うてくれることなんて――

「お帰り！ のび太君！！」

——え??？——

僕は今夢の中にでも居るんだろうか？

それとも、白昼夢ってやつ??？

僕は立ち尽くした。

そんなことあるわけじゃないか。

でも、それなら、今僕の目の前に居るドラえもんは——????？

「ドラ——」

「のび太君、喋らないで！」

ドラえもんは慌てて僕の口を、その丸い手で塞いだ。

「ぼくもびつくりしたんだよ。

急にこつちに帰っていいって事になってね。

で、さっきこの部屋について分かったんだ」

ドラえもんはちらりと目配せをした。

その視線の先には——さっき僕が使った道具、ウソエイトオーオ
ーがある。

「その道具が出てきて、のび太君。使ったんだろう？
で、僕が二度と帰ってこないって言ったんだろ？」

僕は静かに頷いた。

ドラえもんは柔らかな笑みを浮かべて、僕の口に当てた手をそつと離れた。

「ドラえもん？」

「なあに？ のび太君？」

優しい声が僕の心いっばいに広がる。

これからはずっと、ずっと一緒に暮らせるんだ！

僕は嬉しくて、たまらなくて泣き出してしまった。

そして、これはとりあえず。

念のために『これからはずっとドラえもんと暮らさない』って言った。

道具の効き目はどれくらいあるか分からないけど、でもこれは言わなければって思ったんだ。

ジャイアンたちの悪ふざけはまだ、僕の中でしこりとして残ってるけど、

それでも、感謝はしている。

だってドラえもんと再開できたのは、あの悪戯のお陰だしね。

さてと。

思い出に浸るのはこれくらいにして、僕はそろそろ昼寝でもしようかな？

僕はいつものように、座布団を二つに折ってごろりと横になった。目を瞑ってうとうととしていたその時。

「ただいま！ のび太君！！」

急にドラえもんの声がして、僕は飛び起きた。

「ド、ドラえもん？」

まだ出かけてから、ちよつとしか経ってないよ？？」

ドラえもんはちよつと照れながら、ちよつと長居しすぎちゃったから、行ってから10分後位の世界に戻ってきたんだって言った。

「そ、そうなの？」

じゃあ、ちゃんとドラミちゃんに会えたんだね」

「うん。あ、そうだ。」

これ、ドラミから、のび太君へって」

そう言つとドラえもんは僕に小さな紙袋を手渡した。

「僕に？ 見てもいい？」

「うん」

紙袋の中身はかわいらしいカタチのクッキーだった。

その上にピンクのカードがちょこんと乗っている。

カードを開と中には小さなかわいらしい文字で

『お兄ちゃんのコト、よろしくお願いしますね』と書かれていた。

「なんだ、ドラミのヤツ。」

お兄ちゃんのこと信用してないなあ！」

ドラえもんはカードを覗き見ると、ちよつと怒ったような仕草をした。

でも、その顔は笑っている。

「良い妹だね」

「そうかな？」

僕はそう言つと顔を見合わせて笑った。

——どうか

どうかこの幸せな時間が、長く長く続きますように——

第四話（後書き）

帰ってきたドラえもんの話は個人的にもものすごく好きです。

テレビ版（新・旧）共に見ました。

（新の方のスネ夫はドラえもんのきぐるみを着てのび太君をだましており、「そこまでしなくても…」と思いましたか…）

今回の小説は自分の好きなように原作とアニメ版を混ぜて『帰ってきたドラえもん』をアレンジしてしまいましたので、原作ではどら焼き買って無いじゃん！とか思う方も居ると思います。

それと、この話はすでに道筋が決まっていたので、小説にするほどもないと思う方も当然居ると思います。

（お叱りの意見があっても当然でしょう。本当にすみません）

もともと書いてみたいな、と思っているドラえもんの話がありました。今回の話はその布石のような意味合いで載せてしまいました。出来上がり次第UPしようと思っていますので、そちらの方も読んでいただければ幸いに思います。

自分の拙い文章に最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5974i/>

ぼくのドラえもん

2010年10月10日07時13分発行